

Title	始祖と動物
Author(s)	井本, 英一
Citation	大阪外国語大学論集. 8 p.57-p.70
Issue Date	1993-03-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79583
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

始祖と動物

井 本 英 一

Ancestors and Animals

Eiichi IMOTO

十世紀の初め、バグダードのカリフは、カスピ海の北に栄えたユダヤ教国家であるハザル国の、さらに北に位置したヴォルガ・ブルガールの国に、使節団を派遣した。使節の随員の一人で、カリフ書簡の朗読などの重要な役目を担っていた、イブン・ファドラーンによる報告書『イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガール旅行記』（家島彦一訳註、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1969年）に次のような記述がある。

途中、彼はバーシュギルドという、トルコの一部族の国に立ち寄った。彼の記述によると、このトルコ人は、人に逢えば頭部をもぎとり、体を残して、頭を持ち去るというような寧猛な人間で、男根に彫刻した木片を吊るし、神として崇め、願いごとをしたという。また、彼らの中には、蛇を崇拝している集団、魚を崇拝している集団、鶴を崇拝している集団がいて、彼は実際に彼らに出会っている。鶴を崇拝する集団は、彼に次のようなことを教えた。すなわち、彼らはかつて、敵の部族と戦い、それを打ち破った。それというのも、敵の背後で鶴が鳴き叫び、そのために、敵は優勢であったにもかかわらず、驚愕して敗走したからである。そのことがあって、彼らは鶴を信仰するようになった、と。彼らは、鶴は、敵を破ってくれたので、自分たちの神であるといっていた、と彼は書いている（29-30頁）。

イブン・ファドラーンは人類学者でもないのに、これから述べようとするトーテム部族のことをよく描写している。鶴を崇拝する部族とは、その始祖が鶴との結婚によって生まれた部族のことで、戦争のときは、鶴が軍隊を先導し、彼らを勝利に導くのである。蛇や魚を崇拝する部族の場合も事情は同じであった。彼らの敵にもトーテムがいて、その軍隊を先導したと考えられるので、一方だけを論ずるのは矛盾がある。

ヘロドトスの時代（紀元前五世紀）、黒海の北にあったスキュティアの向こうには、アリゾネス人が住み、さらにその向こうには「農耕スキュティア人」が住んでいた。その北に、ネウロイ人が住むが、ネウロイ以北は無人の境であった（『歴史』松平千秋訳、岩波文庫、4. 17）。ネウロイ人は、スキュティア人の慣習に従っているが、ダレイオスの遠征より一世代以前に、蛇の

襲来にあい、全国土から退散し、故国を捨てて、ブディノイ人と共に住むようになった。ネウロイ人は魔法を使う人種で、スキュティア人やスキュティアに住むギリシア人のいうところによると、ネウロイ人はみな、年に一度だけ数日にわたって、狼に身を変じ、それからまた元の姿に還るという。ヘロドトス自身は、聞いても信じないが、話し手は、真実であると誓うといっている（4. 105）。

ネウロイ人は、古い慣習を保持した民族であった。位置的に、もっとも周辺部にいたのは、次々に侵入してくる強力な部族によって押し出され、荒野に面する土地に追いやられたためであろう。彼らの伝承では、蛇に追われたことになっている。彼らは、狼の姿になって、トーテムの世界に参入し、数日後、トーテムの世界から人間界に帰還する儀礼を行ったことがわかる。ヘロドトスの記述は、実に核心をついている。これはヨーロッパに広くゆきわたっている狼人伝説の古い出典の一つに違いない。ネウロイ人は、ヘロドトスの言を信ずれば、スキュティア人と近い関係にあったと思われる。ネウロイ人は、農耕スキュティア人よりさらに外がわにいたので、彼らよりもさらに古い文化層に属していたと考えられる。スキュティア人は、古代ペルシア語のサカ人と同一の民族で、その名称から見てイラン語を話していたとされる。ネウロイ人は、古いイラン文化層に属した民族であった。

ネウロイ人は、年中行事として、毎年決まった時に数日間、狼の姿になった。このような時期は、黄泉の国を訪れて、祖先の霊に接し、祖先のエネルギーを身につけ、再び人間界に帰還して、心身ともによみがえる時期である。年中行事の時期としては、それは新年であったり、新年が固定化する前の祖先祭りの時期であったりする。ヘロドトスの記述では、狼に変身するのは、ネウロイの王のような限られた階級の者ではなく、国民一般におよんでいたようである。古代ペルシアの八月の月名はワルカザナといった。ワルカとは狼のことで、ザナとは人のことであった。ワルカザナ月というのは、狼人に属する月という意味であった。古代ペルシアの暦は、それ以前からの春分正月を受け継いでいた。春分正月を起点とした八月は、太陽暦でいえば、十月から十一月にあたる。この時季が、今ではその意味が忘れられた、何らかの重要な節目で、古代ペルシア暦でも、その名称を残したと考えられる。当時、人々の間では、この月の数日間、狼の姿をする習慣があったから、月名として残ったのである。この時季が、古い時代の新年であったと推測することができる。革命以前のイランでは、新年になると、どこからか、熊や猿を連れた男たちが現れ、現在は近代的な大通りになった、テヘラン市北部の原野を東西に流れる用水路のほとりで芸を見せたものであった。この場合は、日本の正月の獅子舞いや、かつての小正月のなまはげのようなまねごとと同じように、トーテムや祖先の来訪という形式になっている。新年のような節目には、この世と、トーテムや祖霊の世の間で、相互訪問が行われ、両世界の存在物がそれぞれよみがえることになっていた。民俗誌によれば、スコットランドやロシアなど、クリスマス前後になると、狼、山羊、馬、牛あるいは、地域によっては熊などに変身した人間が、家々を祝福し、門付けをする。

狼は古い時代、人間との関係が現在よりはもっと身近であつたらしい。狼の猛猛さは、恐怖と畏敬の念を人々に与えた。ローマのフォロ・ロマーノには、かの有名なローマの狼の青銅像が飾られていた。ルネッサンス期に、狼の乳を飲む双子の像が加えられ、ローマの建国者ロムルスとレムスに授乳する狼として、ローマ建国の象徴として喧伝された。しかし、この狼像は、ローマ以前のエトルスクのものであったことがわかった。ロムルス伝説では、彼ら双子は、狼に育てられたので、このような次第になったわけである。エトルスクの墳墓には、狼の皮を頭に被り、恐ろしい顔をした冥府の王の画が描かれている（野上素一、金倉英一『エトルスク・ローマ・ポンペイ』新潮社、1970年、19-21頁〈金倉〉）。エトルスクでは、狼に変装した者は、冥府の王で、死者を冥府で再生させた。同時に、狼は、ローマの伝統で見られるように（エトルスクでも同じであったと思う）、始祖を養育する動物であった。エトルスクやローマでは、トーテム崇拝はなかったようであるが、その名残は上例の中に見られる。

西域にも狼が始祖を育てた伝承がある。『史記』「大宛列伝」にいう。烏孫王は昆莫^{こんも}と号した。昆莫の父は匈奴の西辺の小国の王であったが、匈奴は、攻めてその父を殺した。そのあと、昆莫が生まれ、野に棄てられた。鳥が肉をくわえて運んでき、狼が授乳した。匈奴の長、単于は、これは神であると考え、引き取って養育した。長ずるにおよんで、軍を率いて功があつたので、父の民を昆莫に与え、西域を守らせた。『史記』の伝承と『ブルターク英雄伝』「ロムルス」の伝承には似たものがある。両者とも捨て子にされるが、鳥に食物を与えられ、狼に乳を飲まされて、成長して国家を建てている。鳥と狼が出てくるのは、単なる偶然の一致ではなく、両者の属した民族の、太古のトーテムであった。日本の氏族神を祭る神社の前に、鳥居が立つ。鳥居の前に狛犬が立つ。鳥居の前身は、その先に鳥が止まった柱である。鳥と柱と狛犬が一体となって、トーテム・ポールを形成する。ロムルスの伝承では、嬰兒ロムルスが棄てられたそばには、イチジクの木があつた。ロムルスの場合も、この生命の木と鳥と狼が一体になっていたといえる。

モンゴルの始祖伝説では、これらの象徴の結び付きは緩い。『モンゴル秘史』1（村上正二訳註、平凡社、1979年）によると、寡婦アラン・コアは三人の子を生んだ。彼女のいうところによると、夜ごとに、光る黄色の人が、テントの天窓から入ってきて、彼女のお腹をさすり、その光が彼女のお腹の中にしみ通っていき、出ていくときは、日月の光線に沿って、黄色い犬のように、はい出て行ったという（29頁）。この伝説は、日月の光線による受胎と解釈されているが、天窓から入ってくるというのは、鳥として天窓に飛来することである。鳥が黄色い人の姿になって、支柱に沿って降りてきて、アラン・コアの胎内に入り、去るときは、黄色い犬のように、はい出した。犬は狼に当るものである。この伝説では、頂上の鳥、中間の柱、下部の犬（狼）の三つが、緩い結び付きをなしている。これとは別の伝承で、モンゴル部族の発祥を物語る、本書の冒頭の伝承によると、天命によって生まれ出た蒼い狼と、その妻である白い雌鹿が、ブルカン岳に住んで、子孫をつくっていった（5頁）。ここでは狼は出てくるが、柱や鳥の姿が見えない。モンゴルの始祖伝説では、狼の姿は何とか保持されているが、十世紀のイブン・ファドラーンがトルコ

民族の中に見たような、トーテム部族は存在しない。

欽明天皇が幼少のとき、夢の中で人が出てきて「秦大津父^{はたのおおつち}という者に恩顧をおかけになると、成人されて、必ず天下を保たれるでしょう」と申し上げた。天皇は夢から醒めて、人を遣わして大津父を探させたところ、山城の深草で彼を見つけた。天皇は彼に「何か変わったことはなかったか」と尋ねた。彼は「何も申し上げることはございませんが、伊勢で商いをして帰る途中、二匹の狼が争って血まみれになっているのに出逢いました。そこで馬から降りて、争うのを止めさせ、血まみれになった毛を洗って、ゆかせました。そこで、二匹とも命を全うしました」と申し上げた。天皇は「きっとこの報いだろう」と考え、大津父を近く召した。皇位についてから、彼を大蔵の司につけた（『日本書紀』欽明天皇即位前紀）。二匹の狼は、狢犬のように、本来、陰陽の二匹から成る古いトーテムの名残である。夢を通じて大津父という者が現れ、彼に対する動物の恩返しというモチーフになっているが、狼自身は、天皇の守護霊としてのトーテムである。大津父に、トーテムが自分たちに注目させ、天皇にそれを報告させたのである。狼は、紀本文にもあるように、神と見なされていた。天皇にとっては、トーテムの観念はなかったであろうが、神を救った大津父を寵愛したのである。

日本では、子供が生まれると、庭に苗木を植える習慣があった。生命力が人よりも長い樹木にあやかって、子供の無事の成長を願う意味もあった。男児の場合は高野槇、女児の場合は桐といった区別もあったが、仮に十年生の苗木であった場合、高野槇は、棺材として使用できたであろうが、桐は嫁入道具の木材にはなりえなかった。伊波普猷『をなり神の島』1にいう。沖縄島では、子供が生まれるとすぐ、その屋敷内にある木一本をその子の所有に定めることになっている。この材料をトーテミズムの研究者が見たら、植物トーテムの痕跡として、早速カードに取るに違いない。旧暦八月の節日には、七歳までの男女の子のいる家では、御飯を炊き、アラハー（その日、まだ誰も汲まない井戸）に連れてゆき、薄の葉で若水をかけながら、男の子には、^{よひと}与人になれといい、女の子には、善い人の妻になれという。それが済んで家に帰ると、子供らを銘々の所有する木の下に連れてゆき、戴いた御飯の一部を木の根に据え、その上に水を注ぐ（平凡社、1973年、215頁）。沖縄島の場合、子供が生まれてから苗木を植えるのではなく、すでに成長している木を新生児に割り当てる。苗木を植える場合でも、その苗木は、どこかで成長しているので、屋敷内にあるか、ないかの違いである。樹木は、本人の出生の前からあり、死後も、長生きする点で共通している。伊波、前掲書によると、十五世紀末の南島では、七月十五日の盂蘭盆の日、諸寺院では、きぬがさをつくる。さらに人形や鳥獣の形を社寺に飾りつける。市民は男子の少壮なる者を選抜し、黄金の仮面を被ぶせ、笛を吹き、鼓を打って、社寺に詣でる。この晩は、国王も台臨され、雑戯が行われ、多くの見物人が街を填め、巷に溢れる有様であった（93頁）。七月十五日と八月十五日は、同じ系統の節日で、いずれも、祖先あるいはトーテムと接触する日であった。人は、地上のトーテムの世界である社寺に詣で、トーテムや祖先は、社寺に迎えられて、人を訪れてきた。社寺は、通常は空っぽの空間で、この世とあの世の境界であった。南島には、植

物と鳥獣のトーテムの名残があったと考えられる。

間宮林蔵が、カラフト西海岸のスメレンクル族を調査した次第を口述し、村上貞助が編纂した『北蝦夷図説』巻之四（大谷恒彦訳、教育社、1981年）に、次のようなことが見える。彼らは、貧富の差はなく、どの家でも犬を飼っているが、犬をかわいがる。また、一家の者は男女を問わず、みな、犬を飼育している。最低でも、犬は家人の数だけいるので、これは祖父の犬、これは祖母の犬、これは長男の犬、これは次男の犬といった具合である。しかし、実際には、一人で三頭も五頭も飼っている場合が多く、一家の犬の数は相当なものである（192頁）。

樹木の少ない北方では、動物がトーテムと見なされたのは当然である。銘々に、その人に割り当てられた木があるのと同じように、その人に割り当てられた動物がいたのである。スメレンクル族の場合は犬で、銘々の犬が、その人の守護者でもあった。犬の生命は、十数年に過ぎないから、自分の犬が死ぬと、新しい犬を指定しなければならない。何匹か予備の犬がいると、そんな場合、容易に替えることができる。間宮の口述にはないが、人が死んだとき、そのときの彼の犬と予備の犬たちは、いっしょにあの世、太古のトーテムの世界に帰還したのかも知れない。愛知県の弥生式時代の墓からは、人骨と共に犬の骨が出土した。故人が可愛がっていたので、家人がその犬を遺体の傍に葬ってやったのだらうとの解説がほどこされていたが、古いトーテム崇拜の名残であったとも考えられる。古代中国の殷墟の亜字型大墓に収納された遺体の下から、犬の骨が出土する。犬が死者の魂を、あの世に導くためであるとも、外から遺体を覗く悪霊を守るためであるとも解されている。ゾロアスター教徒の葬儀には、四つ目の犬が臨終の人の傍に連れてこられる。犬が動き出したら、人は死んだとされる。四つ目というのは、目の上の眉毛のところに、黄色の塊がついていて、あたかも、目が四つあるように感じるのである。起源的には、生の世界を代表する犬と、死の世界を代表する犬が合体して一体になったもので、目だけは四つある。ゾロアスター教徒の葬列の先頭には、この四つ目の犬が進み、鳥葬の場である沈黙の塔に遺体を導いた。古代イランともっとも近い関係にあった、古代インドにも四つ目の犬がいた。辻直四郎訳『リグ・ヴェーダ讃歌』（岩波書店、1970年）にいう。死者の国の王ヤマの使者は、二匹の斑の四つ目の犬で、道を守り、死者をヤマの国に導く（231頁、10.14.10-12）。ヤマ王は、仏教では閻魔王として地獄で死者を裁く。古代インドや仏教では、ヤマは終末の王としての色彩が濃いが、古代イランでは、これに反して、ヤマ（『アヴェスタ』ではイマと表記される。古代ペルシアではヤマといった）は、人類最初の王とされる。つまり、イランでは始原の王とされるのである。四つ目の犬は、もとはトーテムで、そのエネルギーによって、人間が再生することができた。『リグ・ヴェーダ』では、ヤマには二匹の四つ目の犬がいることになっている。本来は一匹でよかったのが、四つ目と斑の意味が忘れられ、再び、二匹に返ったのであろう。斑は、二匹の色の違った犬が一体になった表象である。犬は人の屍肉を食うので、屍肉を食う鳥と同じように、人間の魂の運び手と古くから見なされていた。

ヘロドトスの『歴史』に次のような話がある。古代エジプトのランブシニトス王は、冥界へ生

きたまま降ってゆき、豊穡の女神であるデメテルと穀子^{こい}を争い、勝敗のあったあと、女神から黄金の手巾を土産にもらい、地上に戻った。エジプトでは、ランプシニスが冥界から帰還してから、祭りを催すようになった。当日、一人の司祭が、他の司祭が織った衣を身に着け、目隠しをされたまま、二匹の狼の手引きで、三・五キロ離れたデメテル神殿に連れてゆかれる。そのあと、その狼がまた、司祭を神殿から元の場所に連れて帰ったという（2.122）。

古代エジプトでは、人間を冥界に導くのは、二匹の狼であった。地上でこれを演ずる場合、冥界としてつくった、デメテル神殿に、司祭は目隠しをして参った。目隠しは地下界の暗闇を象徴する。司祭が冥界降りと冥界からの帰還を演じることによって、共同体全員のよみがえりを代表したのであろう。二匹の狼は、司祭固有のトーテムとも、共同体の守護者としてのトーテムとも考えられる。司祭が、デメテル神殿に参るとき、新しい晴れ着を着るのは、日本人の新年の宮参りと同じである。日本の場合は、二匹の狼に導かれるのではなく、入口の鳥居のところで、二匹の狛犬や狐や狼に迎えられるのである。新しい衣服に、冥界の霊気を滲み込ませ、それを身に着けて、一年を健康に過ごそうという願いがある。インド・イランのヤマ王は、終末の王であり、始原の王でもあった。つまり、死と再生をつかさどる王であった。デメテルも、穀物の霊魂の枯死と再生をつかさどる女王で、女性原理であることは、生産性に重点が置かれていたことがわかる。日本では、葬儀の帰りに、ハンケチのような布をもらうが、同じことがエジプトでも行われていたことは興味深い。女神の黄金の手巾とは、デメテルの霊気が滲み込んだ、女神の衣服の布切れであった。穀子遊びは、偶然に出る目によって、神の意志を知ること、いろいろ、形を変えて、神前で行われる。

エチオピアに住むボディ族の牛には、一頭一頭別の名がついている。彼らの牛は、全て、色と模様、性別、成育段階の名称の組み合わせで成りたっている。ボディ族自身の名も、牛と同じく、色や模様になんだものが多い。ボディ族の一人一人は、自分がになる色と模様を具現している牛をもつ。どの牛もやがては死ぬ運命にある。ボディ族は、自分の存在のよりどころであった牛が死んだ場合、他部族を一人殺しにでかける。だから、どのボディ族も、三十歳をこえるころには、人殺しを少なくとも一度は経験している（福井勝義「サバンナの色彩言語」『i s』総特集色、241-242頁）。

間宮林蔵が調査したスメレンクル族の犬は、死亡した場合、そのあとをつぐ犬がいた。東アフリカのボディ族の場合は、他部族を殺しに出かけるという。ボディ族の一人のアルテル・エゴである牛が死ぬと、その牛をよみがえらせるために（あの世で牛が生まれ変わるように）人間一人を犠牲にして、牛をあの世で再生させようとした。ボディ族の牛は、トーテムではないが、人間と動物が双子のように結びついているのは、古いトーテム崇拜の名残を感じさせる。

ギリシア神話の女神ヘカテは、犬を連れた辻の神であったり、犬、狼、馬の姿をして現れる。ヘカテには供物が捧げられたが、夜のうちに、貧民がお相伴にあずかった。ヘカテの夕食といって、ギリシア人やローマ人は、十字路や三叉路に、毎月、供物を供えた。ヘカテには、犬が犠牲

として供えられたが、その前に、家族の全員が犬に手を触れた。家族全員の罪・穢れを犬に移して、あの世に送るためだといわれた。ヘカテは、ホメロスには現れないが、ヘシオドスの『神統記』には「ヘカテの讃歌」が出てくる。しかし、ここでは、ヘカテは、冥府の女神としては描かれていない（高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店、1960年、「ヘカテー」。J・ヘイスティングズ『宗教・倫理百科事典』6，エディンバラ、1913年、「ヘカテの夕食」。ヘシオドス『神統記』岩波書店、1984年、55頁）。

ヘカテは、冥界の女神で、犬あるいは狼（あるいは馬）を使いとする者であった。この段階では、ヘロドトスが伝える、エジプトのランプシニトスの冥界帰りを記念した祭りで、二匹の狼に導かれて、司祭がデメテルの神殿に参る話に、ある種の親縁性がある。さらに古くは、ヘカテ自身が、犬や狼であった。ヘシオドスには、このようなヘカテは出ないが、民衆の間では広く信じられた民俗であったに違いない。ヘカテの姿の中には、いくつかの古い習俗の段階が、一つになって表されている観がある。彼女が辻の神で、夜中に祭られたというのは、死者の魂の導き手で、葬儀（古くは夜におこなわれた）のさいに、辻で一回立ち止まり、何らかの儀式を行ったことを物語る。ヘカテに犬を犠牲として殺すとき、家族全員が犬にさわったというのは、日本式にお祓いの感じがするが、これから死のうとする犬、つまりヘカテに手を触れて、そのエネルギーをもらおうとしたのではないかと思う。おそらく、殺した犬の肉を、皆で共食したと考えられるので、皆の罪・穢れのついた肉を食うわけにもゆかなかったであろう。

トーテムは、常日頃、みだりに手を触れるものではなかった。犠牲にするような特別のときにだけ、触れることができた。中国四川省の山地に住むロロ族の姓は、樹木名あるいは動物名、あるいは両方の名前から成る。これらの動植物が彼らの祖先だと考えられている。彼らに、その姓を尋ねるときは、「あなたがさわらないものは、何ですか」という。尋ねられた人が、「私はシトロンにさわりません」といえば、彼の姓はシトロンである。彼らは、その姓に用いられている動物や植物を、さわったり、食べたりすることはできない。しかし、この場合、これらの動物や植物は崇拜されるわけではない（ヘイスティングズ『宗教・倫理百科事典』12、1921年、405頁）。日本の例をあげれば、南方熊楠の名がある。こちらは、姓ではなく、名であるが、動物と樹木の名をつけている。南方は「南紀特有の人名——楠の字をつける風習について——」の中で、南方氏は、子供が誕生するごとに、藤白王子社に参り、その傍に立つ神木の楠の字を神主から受けた。族霊（トーテム）として、人名につけた、といている。また、「トーテムと命名」では、『多武峰縁起』に、鎌足を妊娠したとき、その母の身から藤の花が生じ、日本中に満ちた夢を見た、とあることから、藤原氏にとって、藤はトーテムであったと主張している（『南方熊楠全集』3、平凡社、1971年）。

古代イランの人名には、ダレイオスのように、「富を保持する者」の意味をもったり、ミスリダテスのように「ミスラ（ミトラ）によって創られた者」の意味をもったりするもののほかに、ゾロアスターのように、「老いたラクダの所有者あるいは子孫、元気なラクダの所有者あるいは

子孫、黄金色のラクダの所有者あるいは子孫」の意味をもった人名や、タフマ・ルパ（ウルパ）のように、「勇敢なキツネの所有者あるいは子孫」の意味をもった人名がある。これらの人名は、古いトーテム信仰の名残であろう。トーテムは、強力、獐猛であったり、有用であったり、その姿が美しかったりする必要は、必ずしもないので、ゾロアスター教の教祖の名に、ラクダの名が含まれても、別に不思議はないのである。イランでも、他の国と同じように、子供に動物やつまらない事物の名をつけ、他人の邪視を避ける習慣があるので、これらの人名は、子供のときの名を、そのまま名乗っているのだと考えられないこともない。イラン東北部にゴルガン州がある。古代ペルシア時代、ギリシア人によって、ヒュルカニアというギリシア語化された名前と呼ばれた古代ペルシア帝国の行政区である。古代から「狼たちの国」と呼ばれていた。住民たちは、遠く離れたネウロイ人が、年に一回、数日間、狼に変装したように、狼の仮装をする習慣をもっていたと考えられる。それも、八月の「狼人月」に行ったのであろう。イランには、ケルマーンやケルマーンシャーという古い町がある。前者は、ギリシア人によってカルマニアと呼ばれた古代ペルシア帝国の行政区であった。ケルムというのは、虫や蛇の意味で、同じく、虫や古くは蛇を表す英語のウォームと同系のことばで、ケルマーンは「蛇たちの」、ケルマーンシャーは「蛇たちの王」を意味する。これらの地方には、ササン朝の始祖のアルダシール一世が、七つの首をもった蛇を退治する伝説が伝えられている。ササン朝のアルダシールに率いられたペルシア人が、蛇をトーテムとする原住民を征服したという、征服者の立場に立った始祖伝説である。

古代イタリアでは、ラテン語が話されたが、その同系語であるオスク語が、中部から南部にかけて話されていた。オスク語では、イタリアのことをウィテリウといった。オスク語と同系であるウンブリア語やラテン語では、雄牛をウィトル、ウィトルスといったので、イタリアという地名は、「雄牛の国」という意味をもっていた。これがギリシア語化した形で、イタリアと呼ばれ、ラテン語の中に入った。イタリアの地に征服者が侵入したとき、国土が牧地のようにだったからこう呼ばれたのではなく、原住民の間には、雄牛をトーテムとする民族がいたから「雄牛トーテム民族の国」というのが原義に近い。エトルスク人やローマ人は、雄牛ではなく、狼をトーテムとした文化をもっていたので、別の先住民が雄牛をトーテムとしていたと考えられる（F.アルトハイム『ラテン語の歴史』フランクフルト・アム・マイン、1951年、26-27頁）。

西アフリカのツィ語を話すガーナの黒人は、種々の動物や植物の名をもつ氏族や家族に分かれている。彼らは、自分たちの名の動植物を食べることがない。種々の動植物が、彼らの氏族のトーテムになっている。例えば、チャマの町には、マグロ氏族が住んでいて、彼らはマグロを食べない。あるとき、妻を失った男が海岸を歩いていると、一人の美しい女に出逢った。彼は彼女に結婚を申し込んだ。彼女は、自分は魚であり、海底に家がある。彼がそのことにこだわらなければ、結婚してもよいといった。楽しい結婚生活がつづいたが、彼が第二夫人を娶りたいといったときに口論となり、彼は、彼女のことを魚のくせにといったののしった。彼女は末の子を抱いて海に帰っていった。地上に残った二人の子供が、マグロ氏族の祖先になった（J.G.フレイザー『死

にゆく神』ロンドン、1911年、129頁)。

二人の子供というのは、男女のきょうだいのことであろう。それは、双子のきょうだいであってもよい。スーダン南部の湿地サバンナに住むディンカ族は、多くのトーテム氏族から成っている。各氏族は、トーテムとして、動植物や雨や火を信仰している。動物トーテムは、ライオン、ゾウ、ワニ、カバ、キツネ、ハイエナ、ある種の小鳥など、どこでも目にとまるものである。彼らは、決して、トーテムを食べることはない。ディンカ族の伝説では、トーテム氏族の祖先の女が、双子をうんだ。双子の一人はトーテムで、もう一人は人間であった(フレイザー、前掲書、30-31頁)。

上例では、人間とトーテムが結婚し、二人の間にできた双子が氏族の祖先になったり、そのややくずれた形で、祖先の女が生んだ二人の子が、人間とトーテムで、二人は結婚して、その氏族の祖となったのであろう。前例では、トーテムの生んだ子供一人は、トーテムの母と共に、トーテムである魚の世界に帰る。日本神話では、山幸彦と海神宮の娘である豊玉姫は、結婚して、ウガヤフキアエズノミコトをもうけるが、ワニの姿を見られた豊玉姫が、海神宮に帰り、自分の妹の玉依姫を送ってわが子を養育させる。ウガヤフキアエズノミコトハ、叔母の玉依姫と結婚し、皇室の祖先となる。玉依姫も海神宮の娘であるので、山幸彦とウガヤフキアエズノミコトの父子は、そろって異類通婚をしたことになる。

カナダのブリティッシュ・コロンビア州に住むクワキウトル・インディアンとハイダ・インディアンは、世界にも希な、変幻自在な仮面を、秘密結社の儀式で用いる。この種の仮面は、ちょうつがいを用いて、開閉が自由にできる仮面で、例えば、閉じれば熊となり、開けば人間となる。このように、仮面をつけた人は、トーテムになったり、人間になったりして、超自然の霊的世界を見物人に示す。トリンギット族、ツィムシャン族、ニスカ族、ノートカ族も、一種の肖像のような、象徴的意味をもつ幾何学的彩色の施された仮面をもっている(桐島敬子『民族の仮面』岩崎美術社、1978年、20-21頁、挿図9および各部族の仮面の図版)。インディアンにかぎらず、仮面が表象するのは、あの世の祖先の顔である。図譜を見てもわかるように、死後腐敗を起こしかけた顔が、祖先の顔を代表しているようである。一つの仮面がトーテム像と人間の像を表すのは、仮面の本来の意味から外れているように見えるが、トーテム信仰の意識がよく保たれている証である。彼らは、ワシ族、カラス族、狼族、鮭族、シャチ族という具合に、多くのトーテム氏族にわかれていたが、彼らは自分の属するトーテム・ポールや仮面に、トーテムを彫ったので、人間の祖先の仮面とトーテムの仮面が二つあるのが、多くの文化の姿ではなかったかと思われる。氏族の始祖である人間と、その人間を生んだトーテムとが、まだはっきりと区別できる文化と、両者が混然となった文化があるので、截然としない面もある。

米国ニュー・メキシコ州に住むズニ族の一派であるモクイ・インディアンは、いくつかのトーテム氏族にわかれている。クマ氏族、シカ氏族、狼氏族、野ウサギ氏族などで、彼らの信ずるところでは、祖先は、クマやシカや狼である。彼らの各氏族の成員が死ぬと、彼らが属するトーテ

ムにしたがって、クマ、シカ、狼その他に生まれ変わる。ズニ族のトーテム信仰も、モクイ族のそれに近いが、彼らのトーテムの一つにカメがいる。ズニ族は、人が死ぬと、魂はカメに移ると信じている。ズニ族は、死者の魂は、ときどき、もといいた住居に帰ってきて、生者に歓待され、帰ってゆくと信じている。ズニ族の儀礼では、カメを連れてくることで、死者の魂を迎えたことになる。そして、カメを殺すことで、死者の魂を死者の国に送り返すのだとされる（J.G.フレイザー『穀物と野生動物の霊魂』2、ロンドン、1912年、178頁）。

民俗誌を見ると、トーテムを殺してはならないというタブーと同時に、トーテムは一定のときに殺すというしきりがあることに気がつく。古くは、バビロンの新年祭では、バビロンの神マルドゥクは、市のトーテムとしての竜を殺す習慣があった。トーテムがもっているエネルギーを、新しい年の到来と共に、自分自身と、王と人民につけるためであった。竜（蛇）がもっているエネルギーは、祖霊と等しいものとされた。バビロンでは、王は毎年、王位を更新するために即位式をあげたが、この場合も、竜殺しの儀礼が必ず行われた。竜は、川の水をせき止め、饑饉をもたらすので、それを殺すことによって、川の水を流し、饑饉から脱するために、この儀礼が行われているが、竜の体内からトーテムのエネルギーや祖霊を呼び出すことが、その根本にあったように思われる。古代イランでは、竜蛇は悪の代表で殺されるべきものと考えられた。アジ・ダハークは悪竜として、英雄に殺されたり、王の即位にさいして殺されることになっていた。王は、その治世が終わりに近づき、心身ともに弱ると、悪竜によって殺される運命にあった。悪竜の支配による、人民の苦しみを救うため、新しい王は、興起して悪竜を殺し、即位した。イラン人の神話的世界観では、王統は、善王—悪竜—善王—悪竜といった図式になっている。竜は本来は悪竜ではなく、中国の天子の竜のような存在であったと考えられる。王のトーテムであったと考えられ、それを殺すことによって、先王の、あるいは祖先のエネルギーを引き出して、新王が身につけたのであろう。

アッシリアをはじめ、古代イランには、王の獅子狩りの図がある。古代イランでは、恐らくアッシリアでも、竜殺しの神話を実現する以外に、即位する王によって、現実の獅子が殺された。獅子は、古くから百獣の王とされたので、部族のトーテムとは別に、王のトーテムとして特定され、竜は後退して、悪竜と見られるようになったのではないだろうか。獅子が実在しない中国では、熊がこれに代わった。『通典』卷七十七、礼三十七にいう。「およそ侯は天子のは熊くまの侯で白質を用い、諸侯は麋もみの侯で、赤質、大夫のは布製の侯で、画くのに虎豹を以てする。士の侯は布製で、鹿豕を以て画いてある」（杉山二郎『極楽浄土の起源』筑摩書房、1984年、61頁）。儀礼的射的において、階級によって射る動物の種類が違った。古代中国では、殷人は、それぞれのトーテムを棒ずる人々が、虎方とか馬方とか犬方とかいった方国に住み分けたが、射的においては、違っていた。それぞれの身分で射的し、あるいは古くは実物を射たあと、その肉を食べたのであろう。

アフリカのザイールに住むングバンディ族のトーテムは蛇である。蛇は、全ての動物の中の第

一子で、首長の化身である豹よりも高位に立つ。村の首長が死ぬと、彼の霊は豹に宿る。したがって、どの首長も、祖先から仇討をされないように、豹の肉を食べない。もし豹が森で殺されると、その死体は首長の屋敷内に運ばれて祖先に献げられる。ここで皮が剥ぎとられるが、その皮は首長だけが身にまとうことができ、その肉は、よそ者だけが食うことになる（宮本正興訳「ザイールの伝承」『世界口承文芸研究』4、大阪外国語大学口承文芸研究会、1983年、868、876頁）。ここでも、部族のトーテムと首長のトーテムは別である。社会階級が発展すれば、トーテムの種類も増えてゆくであろう。

天武天皇三年（674）七月十三日、猪麻呂という者の娘がワニ（フカ）に殺された。父は海岸に娘を埋葬し、号泣して立ち去ることがなかった。長い日月が過ぎ去ったが、矢をとぎ、矛先を鋭くし、神々に、ワニを殺すことができるようにと願いを立てた。やがて、百匹余りのワニが、一匹のワニを囲んで近寄ってきたので、猪麻呂は矛で、真中のワニを刺し殺した。百余のワニが去ったので、中心のワニを切り裂くと、娘の脛が出てきた。そこで、ワニを串刺しにして路傍に立てた（『出雲国風土記』「意宇郡、安来郷」、『風土記』吉野裕訳、平凡社、1969年）。このような話の背景には、古くは、埋葬地に、ワニを殺して犠牲として供え、死者を再生させる呪術があったと考えられる。猪麻呂の娘がワニに食われて殺されたというのは、より古くは、トーテムであるワニの国に帰ったことをいったのであろう。娘の遺体を埋葬した場所に、娘を食ったワニを殺して安置するのは、娘の遺体に、ワニの霊力を移そうとする呪術であった。仇討の話になっているが、それは本来の形ではない。

トーテムを殺すことには、必然的に禁忌がともなう。日本の神社では、鹿、狐、狼、犬などが神の使者とされるが、実際は、神苑に遊ぶトーテムであったと考えられる。ことに鹿苑の鹿は、古来、殺してはならないというのが定めであった。仏教あるいは、他の文化も、この定めがあった。玄奘の『大唐西域記』に次のような記述がある。素葉城の西へ行くこと四百余里で千泉に至る。ここには群れをなす鹿がおり、多くは、鈴をつけた首輪で飾っている。人に馴れていて、驚き走ることはない。可汗はこれを可愛がり、もし殺害すれば誅罰を受ける（巻二、七、五、水谷真成訳、平凡社、1969年、21頁。杉山、前掲書、28頁）。杉山も指摘するように、この鹿は、可汗たちのトーテムである。この土地は、南は雪山に面し、三方は平地で、水豊かで樹々は茂り、春の終わりには、花々は入り交じり、あやぎぬのようである。このような描写は、楽園に用いられるもので、この地が一種の聖域であったことを物語っている。これらの鹿は、奈良の春日大社の神鹿と同じように、飼育された鹿であった。千泉には寺院や神殿に類するものは、記述の中には見られない。千泉は、可汗の毎年の避暑地だとある。そこには、いわば、離宮にあたる天幕が張られたに違いない。トーテムは、新年や死などの特定のとき殺害され、その霊力を人間に伝えたが、日常は殺害されることはなかった。通過儀礼のさいに、殺害されることがなくなると、以後は全く殺害されることがなくなった。

人間は、生きているときも、自分の魂を特定の動植物や物体の中に隠しているのです、その動植

物が破壊されないかぎり、不死であると考えた。この考えは、多くの民話の中に語り継がれた。フレイザー著、永橋卓介訳『金枝篇』（五）（岩波文庫、1952年）は、第六十六章「民話における外魂」の中で、この種の民話を挙げている。ある王子が、一人の魔法使いと争う。魔法使いはいう。「広い海のまん中に島があり、その島には緑のカシの木が一本生えている。カシの木の下には、一つの鉄の櫃があり、その櫃の中には小さな籠があり、その籠の中には一匹の野兎がおり、野兎の中には一羽の家鴨がおり、家鴨の中には卵が一つある。その卵を見つけて潰すと同時に、おれは死ぬことになる」。王子は、この運命の卵を探し求め、魔法使いと対決し、その卵を潰してしまう（61-62頁）。第六十七章「民俗に現れた外魂」に挙げられた例を見よう。オーストラリアの黒人の一人が、ある日のこと、一羽のカラスを殺した。三、四日後、ラーリーというカラス氏族の一員が死んだ。彼は数日間、病気をしていたのであるが、彼のトーテムが殺されたことが、彼の死を早めた（96頁）。この場合、ラーリーが死んだあと、カラスが殺されると、この氏族の人たちは、ラーリーが（あの世で）生き返ると考えるかも知れない。カラスが先に殺されると、因果的に、ラーリーが死ぬことになる。人間の魂は、一つではなく、複数あるものらしい。靈魂に関する漢字の数が、それを示している。日本の古墳の壁や石棺の表面には、複数の同心円が見られる。古墳時代の人間と動植物の関係は、はっきりしないので、これらの同心円の一つが、動植物に入るかどうか、断言できない。仏教が入ってきてからの輪廻観では、現世の業によって、死後は畜生に生まれ変わった。この場合は、生前から、魂の一つが動植物の中にあるのではないので、外魂が畜生の中にあったとは考えられない。古代中国の方相氏は、葬列の先頭を行ったが、死者の魂の一つが、この熊面のトーテムの中に入っていた。トーテムの中に入った死者の魂は、方相氏が墓壁を叩くときに、墓室内に飛び出し、死者を再生させるエネルギーになったのであろう。祭礼における行列は、神の出御と帰還を表す形式である。行列の先頭に、鳥獣が行く場合、それらは、トーテムの名残と考えてよからう。異教の神々は、ユダヤ教やキリスト教やイスラム教の神々とは違い、毎年、死と再生を繰り返した。神々は出御のときは、死の状態にあり、魂はトーテムに入った。帰還してから、魂は、トーテムから、死せる神々に入り、神々は再生した。トーテムを殺して、魂を引き出すか、魂が自然に死者に流出するかによって、立場が違ってくる。一方では、トーテムを殺害し、他方では、トーテムを殺害するのはタブーとされる。トーテムには、死者の魂や、生者の外魂が入っているので、みだりに殺害しないのがふつうである。

ある種の動植物を食べることをタブーとする伝承が、あちこちで見られる。佐々木喜善『聴耳草紙』（筑摩書房、1964年）にいう。気仙郡花輪村の竹駒という所に、美しい娘がいた。一羽の大ワシが、娘をさらって、洩に落とした。すると洩の中から一人の老翁が出てきて、娘を背中に乗せて、家に送り届てくれた。この老翁はおすすけ鮭の大助であった。老翁は娘と結婚したが、その子孫は今でも決して鮭を食わない（九七番「鮭の翁」）。同郡竹駒村の相川という家に残る昔話。この家の先祖が織田信長に敗れ、奥州に落ちのびていたとき、牛をさらったワシを捕えようと思い、牛の皮を被って待っていると、ワシがやってきて、彼をつかんで、玄海灘にある孤島の松の木の

上にある巣の中に投げ込んだ。彼は何とか巣から地上に降りた。そこへ、一人の老翁が現れ、彼を乗せて気仙郡の今泉川につれて帰った。老翁は、鮭の大助で、毎年、十月二十日、卵を生みに、今泉川の上流に帰るということであった。そこで、毎年の十月二十日、今泉川の鮭漁場に御神酒を供え、鮭留め数間を開けることにした(九八番「鮭の大助」)。昔、遠野郷が、まだ大きな湖であった頃、同町宮家の先祖が、気仙口から鮭に乗って、この郷へ入ってきたのが、この郷での人間住居の創始であると語られている。この人の子孫は、先祖が、鮭のために生き、また鮭のために死んだというので、家憲として永く鮭を食わなかった。もし食えば病むと伝えられて、今でも固く守っている(九九番「鮭のとおてむ」。野村純一「民間説話総説」II(日本を視座に)―「魚養事」を巡って―『民間説話の研究』関敬吾博士米寿記念論文集、同朋舎、1987年)。

佐々木は、昭和六年に旧著を出版したとき、この話に出てくる鮭の大助が、ある家のトーテムであるということを認めていた。トーテムを食べば病むというもの、広く見られる信念である。ニュー・ギニーとセレベスの中間にあるウェタル島の住民は、自分たちが、猪、蛇、ワニ、海ガメ、犬、ウナギの子孫であり、自分たちの祖先の動物を食うと、癪病になり、発狂すると信じている。皮膚病に罹った場合、その動物の骨の煮汁の中に、体を浸けると、病気は治るという(フレイザー『穀物と野生動物の靈魂』2、1912年、25―26頁)。トーテムの肉は、トーテム氏族以外の者だけが食べた。前述したように、アフリカでは、豹が殺されたとき、首長はその皮を被っても、肉は食うことがなかった。かつて、日本の養殖ウナギ業者が、台湾で養殖を始めたとき、台湾人の中には、日本人がウナギを食べることに、強い嫌悪感をもつ者がいたといわれている。人間や動物の死体が、ウナギのいる池や運河に浮いたとき、ウナギの好餌になるかららしい。つまり、ウナギの中に人間の魂が移行するので、古くから、ウナギはトーテムと見なされ、人々は口にできなかったからである。フィリピンのルソン島北部の山地民族であるイゴロット族は、彼らの川にいるウナギを祖先だと思っている。そこで、彼らは、ウナギを捕えたり食ったりしないで、ウナギに餌を与える。その結果、ウナギは、池の鯉のように、よく人になついている(フレイザー『穀物と野生動物の靈魂』II、292頁)日本では、神の使いであるとか、先祖がかかわったといった理由その他で、鶏を食べない地域があちこちにある。おそらく、鶏が死者の再生呪術に用いられたタブーが、このような形で残っているのであろう。シーザーが英国に入ったとき、兎、鶏、鷺鳥を食べない民がいたことを書き残している。それぞれの動物をトーテムとする氏族であったことは間違いない。虎をトーテムとする氏族が、虎を食べないのと同じである(『南方熊楠全集』1、15、77頁他)。この習慣は、シベリア諸民族にも広くゆきわたっていて、一族がその動物の名を名のり、その肉を食べたりはしない、ある特定の動物の子孫であるという観念は、かなり濃く残っている(ウノ・ハルヴァ著・田中克彦訳『シャマニズム』三省堂、1971年、421―422頁)。同一のトーテムを信奉する部族の中では、その部族を構成する諸氏族は、仮に敵対関係に陥って殺し合いをしても、相手の肉を食うことは、ありえなかった。婚姻の場合、それが略奪結婚の形式をとったときは、花嫁の父親が戦いの結果、殺されても、花婿がわの人々は、その肉を食うこ

とは不可能であった。トーテムを異にする氏族どうしの間では、問題はなかった。中国や朝鮮では、原則的に、「同姓婚せず」の立場が貫かれる。その理由の一つは、古いトーテム信仰にあると考えられる。聶がわは、嫁がわのトーテムを殺したり、食べたりすることによって、嫁を聶の家の一員にすることができた。日本をはじめ、中国や韓国のような文明化された地域では、もう、トーテム信仰の名残しか見られなくなった。しかし、トーテムを別にする男女が結婚しても、必ずしも幸福であるとはいえなかった。男女は、それぞれ、相手のタブーとするものを守ることができない場合、別離を余儀なくされた。多くの昔話で我々が見る、夫婦間のタブーの侵犯と別離は、異なったトーテムを信奉する男女の間に起こった悲劇であった。

(1992. 9. 16 受理)